

## プロティノスがこの世界の永遠性を強調することの意義について

豊田泰淳(慶應義塾大学/日本学術振興会)

我々の住むこの世界が生成したものであるか否か、という問いは、プラトンの『ティマイオス』篇における記述を一つの出发点として、古代世界において盛んに議論されたものである。プラトンが、この世界は制作者(δημιουργός)の手によって「ある出发点からはじまり(ἀπ' ἀρχῆς τινος ἀξάμενος)、生成した(γένονεν)」ものであると述べた(*Tim.*28B)ことから、以降この記述を巡って賛否様々な見解が提示されることになる。

アリストテレスに代表される批判勢力は、世界の制作者というアイディアを持ち出すプラトンの神話的記述を文字通り受け入れた上で、そこから導き出される難点を指摘する。その結果、この世界が時間的にある一点を起点として誕生した、という考えを批判するのである。

その一方でプラトン主義者たちは、『ティマイオス』の記述を比喩的に描かれた物語であると解し、「生成した」という言葉の意味を捉えなおそうと試みた。その成果として、世界は実際は永遠であり、「生成した」という表現はより上位のものに存在性を負っていることを示しているのみであって、それ故生成はある時点を目指すのではなく常に起こっている事態である、という見解が有力なものとして所謂中期プラトン主義者たちの間で流布するのである。

プラトン哲学の有力な解釈者の一人であるプロティノス(A.D.205-270)もまた『ティマイオス』篇の記述を比喩的な説明として捉える勢力に与し、上述の中期プラトン主義的論点を引き継いでいる。彼が強調するのは、この世界が「生成した」ことを認める一方で、①それは時間的なプロセスの内ではないこと、②それ故「制作者」は比喩的表現であり、この世界は思案・計画を伴って構築されたものではないこと、③その「制作者」とは、実際は知性(νοῦς)であること、である。その上で「生成」を「上位のものへの存在性の依拠」と解し、永遠的なものである知性に依拠しているこの世界もまた永久に存続する無始無終のものである、と結論付けるのである。

このようにプロティノスは、少なくとも言葉の上では、この世界をある意味では生成したもの、またある意味では無始無終のものとして考えているのである。我々はその一見して両立しない見解をどのように理解すべきだろうか。

本発表の目的は、上記のような『ティマイオス』解釈の歴史を考慮に入れた上で、後3世紀という時代に至ってプロティノス自身が構想したかたちでの「生成」と「無始無終性」が如何なるものだったかを解明し、それらの教義を強調することが彼にとってそれぞれ如何なる哲学的意義を有していたか、を検討することにある。プロティノスに独自の意義を浮き彫りにするために、本発表では彼と同時代の思想状況を同時に検討することにした。その際重点的に扱われるのは、グノーシス派として括られる一派の思想である。グノーシス派の思想は世界創造論に関する豊饒な神話を伝えるものであり、そこに世界の崩壊・終末までを含み込ませる点で特徴的と言えるが、上記のプロティノスの見解は特にそうした世界の生成と崩壊を掲げる思想を槍玉に上げたものであると考えられる。実際、上記の主題は「グノーシス派に対して」と題される第33論攷においてしばしば言及される論点であり、プロティノスが特定の論敵を想定した上で展開されたものであるこ

とは疑いえないのである。

本発表が重要視するのは、(少なくともプロティノスが想定していた限りの)グノーシス派の世界創造論もまた、『ティマイオス』篇の教義をはじめとするプラトン主義哲学の影響を受けていたとするJohn D. Turnerらグノーシス研究者側からの指摘である。すなわち、グノーシス派の原型が有していた独自の神話に世界創造論としての体系的骨組みを与えた要素としてプラトン主義哲学を挙げるのである。この想定に基づけば、プラトン主義の系列とグノーシス派が何らかの親近性を有していることは容易に想像され得るし、既述の通り両者がこの世界の生成・永遠性について正反対の見解を提示しているにも関わらず、プロティノスが自身の哲学との差異を盛んに強調する意図も十全に汲み取ることが出来るであろう。

プロティノスの直弟子ポルフェリオスは『プロティノス伝』第16章において、プロティノスと同時代に古代哲学の系譜を受け継ぐキリスト教徒の一派が現れ、プラトン主義について歪曲した見解を伝えた、と証言しているし、またプロティノス自身も「グノーシス派に対して」第10章において、彼の弟子たちの間でグノーシス派的な傾向を持ち始めたものがあると報告している。つまり、プロティノスは自身の構想するプラトン主義哲学がグノーシス派的に解釈され得る危険性と隣り合わせであることに自覚的であり、またその危険性が自身の属する哲学サークルにまで及びつつあったことを憂慮していたのである。

以上の点において、グノーシス派に特徴的である世界創造論及び終末論を批判しつつプロティノス自身の『ティマイオス』解釈を打ち出すことの内に、彼にとつての重大な哲学的意義を見出すことが出来よう。本発表では世界の「生成」と「永遠性」という論点に立脚した上で、後3世紀に同居したグノーシス派とプラトン主義との差異を列挙・検討し、この世界に関して上述の見解を保持することがプロティノスにとつてのプラトン主義の貫徹であったことを示したい。